

28PA-am377

定期試験を意識した「学修計画書」作成は、学生の学習習慣や成績に影響を及ぼすか？

○倉島 由紀子¹, 木藤 聡一¹, 周尾 卓也¹, 武本 眞清¹, 畑 友佳子¹, 荒川 靖¹, 中越 元子¹
(¹北陸大薬)

【目的】北陸大学の初年次教育科目「基礎ゼミⅠ」において、勉強時間の増加と成績向上を目指し、今年度新たな「学修計画書」を考案して実施した。本計画書の作成が学生の学習習慣や定期試験結果に及ぼす影響を検証することを目的とした。

【方法】学修計画書は、前期・後期定期試験を学生が意識できるようにワークシート形式とした。具体的には、(1)定期試験8週間前に70分×2コマの講義時間で、(2)試験までに必要な勉強時間を学生自らが計算し、(3)科目担当教員が提示した勉強方法アドバイスコメントを参考に、試験までに残された時間での勉強計画を考えられる内容とした。また、実施の際は個人ワークだけでなく、勉強スタイルが似ている学生同士でグループを作り、互いに問題点を挙げアドバイスするようなSGD要素も取り入れた。

【結果・考察】勉強時間の検証には、1年次生116名から無作為に25名を選び、自己申告による週当たりの正課外学習時間を調べたが、「計画書」作成直後に急激に勉強時間が増加するような傾向は見られなかった。一方、各科目の成績については、前年度1年次生との比較において、入学直後実施のプレイスメントテスト(薬ゼミ)の成績が前年度と今年度でほぼ同じレベルであったにも関わらず、生物学と物理学に関しては成績の上昇傾向がみられたが、化学系科目では顕著な変化は見られなかった。

本学の初年次教育は前年度までとは内容が大幅に異なるため、成績上昇は「学修計画書」以外の要因も多いと考えられるが、定期試験8週間前に試験を意識させる時間を講義内に設けたことは良い影響を与えたと考えられる。後期試験に向けても「学習計画書作成」を実施するので、その結果を含め報告する予定である。